

敬和学園大学「まちカフェ・りんく」 実践活動の現状と今後の課題に関する考察

趙 晤 衍

1. はじめに

敬和学園大学では、新潟県新発田市駅前商店街に空き店舗を活用したコミュニティカフェ（まちカフェ・りんく）や地域住民の憩いの場としてまちカフェサロン（茶話室）を拠点に地域活性化事業を展開している。まちカフェは学生たちが主体となった経営を目標としており、6つの事業コンセプトを据えた共生型地域活性化のまちづくりプロジェクトである。まちカフェ・りんく（以下、まちカフェ）は、このような発想から生まれた産官学の連携を見据えた新しい地域づくりを目指す事業として立ち上がった。

まちカフェは、敬和学園大学と新発田市、新発田市社会福祉協議会、地域住民、高校などとの連携による共生型地域活性化を目指して新発田商店街の空き店舗に開店して3年6か月を迎えている。もともとこのカフェは2008年10月に開店し活動を続けてきたが諸事情により2009年12月に閉店した経緯がある。

まちカフェは前身のカフェコンセプトを一部取り入れつつ、名称はまちカフェ・リンクからまちカフェ・りんくへと地域住民に分かりやすい表現に改めて2010年8月にオープンして現在に至っている。なお、カフェ名称の変更には新発田市内の関係者らからの意見を参考に議論を深めて決まったのである。

まちカフェには活動を支える6つの基本コンセプトがあり、本稿では、この6つのコンセプトを基本に据えた実践活動への評価や本学の共生社会学科との関係についての考察を踏まえた今後の課題と展望について考えていくことにしたい。

2. まちカフェ・りんくの概要

・場所：新潟県新発田市諏訪町（新発田駅前商店街）

・まちカフェ・りんく事業の基本コンセプト

- | | |
|------------------------|-----------------|
| 1. 「商店街活性化（まちづくり）への貢献」 | —地域交流空間づくり |
| 2. 「コミュニティ再生への貢献」 | —地域ネットワークづくり |
| 3. 「環境・福祉教育への貢献」 | —環境・福祉コミュニティづくり |
| 4. 「地産地消、食の安全・安心への貢献」 | —地域社会健康づくり |

5. 「地域文化活動活性化への貢献」 ー生きがい・自己実現づくり

6. 「社会起業家の育成」 ーひとづくり

- ・営業時間：09：30～17：00
- ・定休日：水曜日・日曜日・祭日
- ・カフェ面積：約30坪（約30席）、ランチ&喫茶スペース、茶話室スペース、キッズスペース、キッチンスペース
- ※2012年1月に隣の空き店舗を借り上げた多機能型地域住民交流スペースのオープン（約15坪）←高齢者向けお弁当配達サービス開始
- ・学生スタッフ：マネジャー1人（4年）
 - 常勤スタッフ6人（3年～4年）
 - 学生ワンディシェフ（火曜日・第3土曜日）
 - 登録スタッフ約20人（地域連携事業）
- ・市民スタッフ：市民マネジャー1人（起業を目指す）
 - ワンディシェフ7人（元板前の方2人、母ちゃんシェフ3人、その他2人）
- ・指導教員：1人
- ・経営主体：敬和学園大学
- ・協力：新発田市、新発田市社会福祉協議会、新発田農業高等学校、地域住民（赤谷地区住民含む）

3. まちカフェ・りんく事業の理論的枠組みと共生社会学科（ライフデザイン・コース）との関係

まちカフェの開店と共生社会学科のコース制の導入とは深いかかわりがあると筆者は考えている。共生社会学科の新しいコースの検討において社会起業やコミュニティ・ビジネスの考え方を基本に据えることが確認された経緯があったからである。コミュニティ・ビジネスという概念はいち早く日本でも紹介され、その実践も各地で行っていたのでありそれほど目新しい概念ではなかったが、現実には福祉業界におけるコミュニティ・ビジネスや社会起業⁽¹⁾への議論は未開拓の分野であったことを考えると福祉マインド⁽²⁾とビジネスマインドの結合は先進的な考え方であり、取り組みそのものも新しいものであると思われる。

ここでは、共生社会学科ライフデザイン・コースの開設に関わったものとして、まちカフェも共生社会学科ライフデザイン・コースの実践の場として連携していくことが学科においても検討された。以下論述の多くは、共生社会学科ライフデザイン・コースのフィー

ルドトレーニング手引き（筆者作成）を参考にしつつ内容については加筆、修正を加えながらまとめたものである。以下の内容に関しては共生社会学科総意のものではなく筆者として関わってきた一個人の見解であることを予め断っておきたい。

共生社会学科では開設当初からキリスト教主義に基づくリベラル・アーツ教育を土台としながら社会福祉の高度な専門技術を備えたソーシャル・ワーカーの養成に軸をおいてきた。これらの考え方はコース制を取り入れた2010年を機にさらに専門分化されることになった。

現代社会問題の複雑多様化の現象は無縁社会に代表されるようにかつてないコミュニティの脆弱化をもたらしてきている。このような現象は、従来の社会福祉の対象や枠組みをめぐる範疇の捉え方にも大きく係ることになってきている。しかし、社会福祉の対象や枠組みの広がりがあるにしてもこれまでの社会福祉の人間中心主義に基づく福祉の固有性は変わることのない不動の存在であることは言うまでもない。

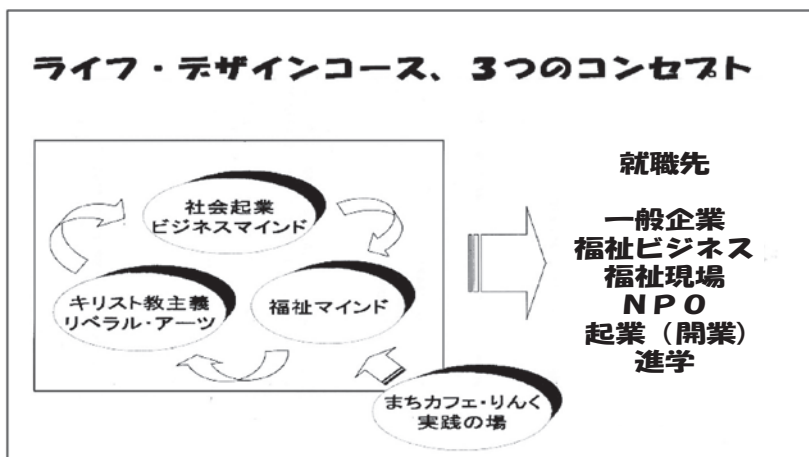
ライフデザイン・コースは、現代社会におけるコミュニティ再生の新しい枠組みに対応するために開設された。ライフデザイン・コースでは、キリスト教主義のリベラル・アーツ教育のうえにこれまでの社会福祉のマインドを継承しつつ、新たなコンセプトとして社会起業の概念を加えた新しい社会貢献型共生社会の実現を目指すことがその目的である。

4. ライフデザイン・コースの教育目標

共生社会学科ライフデザイン・コースにおける教育目標としては右の図のように大きく三つのファクターによって構成される。

その一に、キリスト教主義のリベラル・アーツ教育とは、さ

まざまな学問を幅広く学ぶことで、視野をひろげ、教養を深め、人間らしい心を備えた人間を育てることである。つまり、特定の専門分野にかたよることなく、様々な学問を幅広く学ぶことで国際的な視野を広げ、人類の培ってきた知恵を深く学び、一人一人の個性を尊重して、個人の尊厳を育成することを目指すものであり、その基本的な哲学は本学の建学精神であるキリスト教主義であるといえる。



その二に、21世紀型共生社会のあり方を福祉の切口から探究していくことの意義は大きい。なぜなら福祉は時代の変わり目に捕われることなく、いつも生活弱者の立場からそのあり方を問つづけてきた。その根底にある人間中心主義に基づく社会福祉の思想や哲学とその考え方を具現化していくためのソーシャルワークの技術は社会福祉の専門知識を含めた共生社会学科の軸足に値する極めて重要な考え方である。

その三に、社会起業とは、社会的課題を従来の福祉やNPO、ボランティアの考え方とビジネスのコア・コンピタンス（企業経営の高いスキル・ノウハウ）の考えを融合させた新しい社会貢献型ビジネスを意味している。前述の現代社会におけるコミュニティ再生の新しい枠組みに対応していく考え方にもっとも重要なキーワードがこれに値するものであり、ライフデザイン・コースにおける起業家精神の育成はまさにこの考え方であるといえよう。

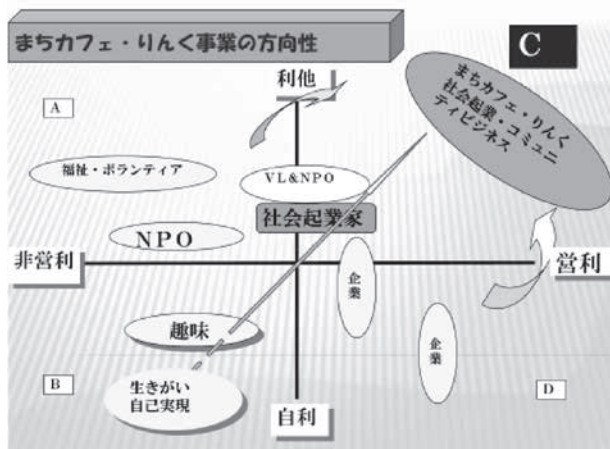
ライフデザイン・コースが目指すあるべき姿として、社会福祉の知識と哲学、ソーシャルワークの知識と技術をしっかり学びつつ、人間福祉とは何かへの問いかけとともに従来の企業もつ優れた経営や創造的ビジネス展開のスキルを学ぶことが涵養であること。

この二つのファクターを支えるもっとも重要な要素にキリスト教主義の精神が存在するというのを忘れてはいけない。このことが「福祉マインド」をもつ企業人の育成に深く、確実につながることでありといえる。

したがって、共生社会学科におけるフィールド・トレーニング（実習）の目的は特に「キリスト教主義に基づくリベラル・アーツ教育」と「福祉マインドを備えた企業人の育成」に軸を置いた企業やNPO団体などの実践活動への取り組みを通したボランタリー精神と企業のコア・コンピタンスを同時に修得していくことを目指すことになる。

5. まちカフェ・りんく及びライフデザイン・コースの目指す方向性

まちカフェ・りんく及びライフデザイン・コースが目指すべき方向性についてより具体的に示したものが右の図である。図の見方として、縦軸は行う活動の結果物が自分への利益になるのか、他人への利益になるのかを端的に表している。それに対して横軸は行う事業や活動の最終目標が非営利なのか、あるいは営利なのかを端的に表している。これら縦



横の軸を基に4つの考え方が成立する。

まず、Aの領域は行う活動は非営利であり、行う活動も他人のためということになる。簡単に言えば、これまでの福祉やボランティア活動、NPO活動がこれに値すると言える⁽³⁾。

Bの領域は、行う活動ないし活動は非営利が原則であり、自分のための利益ないし活動になる。簡単に言えば個別に行っている趣味や生きがいなど自己研鑽活動の領域がここに該当するといえる。この領域についてはこれまであまり重視されてこなかった経緯があり、AとDの領域をより柔軟に導く概念ではないかと考えられる。この領域単独ではなく社会起業全般を担保とする上で欠かすことのできない重要な要素になると筆者は考えている。

Dの領域は行う活動は営利が目的であり、自分の利益のためであるとの傾向が強い。簡単に言えば現代社会における企業活動がこれに値すると思われる。ただし、例外も存在することを忘れてはならない。もともと企業は社会のためにあるべきだという目標をしかりと掲げた企業もあるからである。

これらABDの領域に対してCの領域は、行う活動ないし手法は営利であるものの行う活動ミッションの最終到達目標は他人にある、という一見矛盾した論理の領域である。Cの領域で大切なのは、営利の意味合いを柔軟に解釈する必要があり、この営利の持つ意味の捉え方によって事業の方向性も大きく変わることである。つまり、Cでいう営利という意味は、営利そのものが目的ではなく活動を通して持続可能な自主財源の確保のために必要な利益を創出することを指しており、創出された利益も一般論的という企業のように株主や役員に配分されることではないのがその特徴である。ここで創出された利益は言わば、適正な人件費や事業への再投資が基本原則であることが重要だ。筆者はこのことを適正な利益・適正な営利として表現しており、むやみに利益ばかりを追求することが目的化してしまうことへの警戒として考えている。

では、Cの領域を目指す理由はどこにあるのか。近年、福祉を取り巻く環境の変化はかつてないこれまでの措置行政という既成事実を大きく覆すことであった。とりわけ市場原理の導入は社会福祉界に大きな衝撃を与えてきたが、その波は最近においても勢いを増しているように思われる。

介護保険制度と共に始まった企業の福祉事業への参入はいくつかの不幸の事を除けば財政圧迫を強いられる現政権下においては既存の福祉供給主体によきお手本になっていることは否定できない事実であろう。改めて社会福祉法人のあり方が大きく問われる近年の背後には企業の効率化による費用対効果の原則が色濃く反映されていると考えられる。つまり、左の図でいうDの領域に対する企業のもつコア・コンピタンスについて再評価すべきである。Aの領域からとすれば、これまで時代が変わってきても頑なに守ってき

た社会的使命をDの領域でいう企業の優れたコア・コンピタンスと結合させることである。ただし、これまでの企業のイメージには金儲けという拭えきれない固定観念が長年に渡って定着してきたのも事実であり、そう簡単に払拭されるとは思えないのが現実であろう。

一方、Aの領域でいうこれまでの福祉業界も様々なところで問題を抱えている。これまで長らく福祉業界は社会的使命を盾に措置運営の法則に安住しつつ時代の変化に対して柔軟に対応することもできず忘れてきたのは事実であろう。これらの課題と連動して、社会福祉法人の経営のあり方もこれまで以上に大きく問われるようになってきたのである。つまり、極端な表現かも知れないが、従来の社会的使命のみではもはや時代の求めに応じることができないということ、それらを担保にするのは健全かつ効率的な経営基盤をどう整備するか、ということが特に大きく問われてきたのである。ここで改めてAの領域も再評価の対象となることであり、それは、従来の福祉の社会的使命という不動の価値にDの領域でいう企業の優れたビジネスマインドの援用こそがこれからの福祉には欠かせないことであろう。

以上のことを改めて敷衍していくと、領域Aの弱点をDの強みで補い、領域Dの弱点をAの強みで補うことである。つまり、領域AとDの強みを領域Cに結集させていくことを意味している。さらにここで大切なのは、領域Bの持つ意義の深さである。領域Bを見据えた領域AとDの結合で成り立つ実践に新しい活力を見出すための方向先として領域Cの考え方がある。

まちカフェ・りんくの実践活動を支える基本コンセプトには、このような考え方が据えられており、それらの考え方は共生社会学科ライフデザイン・コースの開設検討においても反映された。さらに、関連科目として社会起業論やコミュニティ・ビジネス論、福祉ビジネス論、地場産業論、フィールドトレーニング実習の開設が行われた。その他、特に国際文化学科における関連カリキュラムとの連携を見据えた取り組みとして幾つかの科目が位置付けられ、これらの科目を履修することによって優秀な人材を育成することが当初の計画であった。

6. 6つの基本コンセプトを見据えた実践活動の分析

①ランチと喫茶事業：

学生主体によるカフェ運営を基本にしながら地域住民の積極的な参加と協力のもとで事業を展開している。特にランチタイムにおいては、地域住民によるワンディシェフの仕組みを取り入れ⁽⁴⁾、地産地消の食を通じた地域住民健康づくりを目標としている。ワンディシェフは合計7名が所属しており、新発田社会福祉協議会において給食ボランティアを務めた方や長年飲食関係の店を運営してきた方、コミュニティレストランの開業を目指

す方など多様である。殆どの方は定年を迎えた方であり、学生スタッフやお客さんとの触れ合いを通して生きがいや自己実現を兼ねた地域貢献型の活動を展開している。ランチタイムにおける学生スタッフの活動はワンディシェフの手伝いやホールを担当している。

学生スタッフ中心の喫茶タイムとは違ってランチタイムにおける学生スタッフとワンディシェフとの協働活動には互いに刺激し合う良きパートナーでありライバルでもある。特に学生スタッフにおけるワンディシェフの存在は人生の先輩として大学では学べない貴重な体験を得ている。ランチと喫茶活動は、学生とワンディシェフとお客さんとしての地域住民による居場所づくりの共同作品であるといえる。

②多機能型地域住民交流スペース（まちカフェ茶話室）事業：

この事業は、新潟県地域支え合い体制づくり助成事業の採択（2012年）によって既存のまちカフェに隣接している空き店舗をさらに借り上げて地域住民の交流スペースを確保して展開されている。この活動は、学生スタッフだけでなく市民スタッフによる関わり方を強化して運営を展開している。この交流スペースの一角には、古本コーナーを設け地域住民の憩いの場となっている。特に古本を目当てに老若男女問わず多くの方々がこの茶話室を訪れている。古本を切り口とした新しいコミュニケーションの場として様々な広がりを見せている。特に古本の多くは地域住民からの寄贈であり（2013年度の寄贈本数は2,000冊程度があったとのこと）、寄贈された本はまた地域住民の手に渡って循環されていく。ここの利用者の7割は高齢者であり、市民スタッフとの井戸端会議は日常の風景としてすっかり定着してきている。また、子育て中の親子グループや地元高校生の勉強の場としても活用されている。さらに、バス停の前である立地条件でバス待ちの高齢者の方にも自由に使われるよう開放している。

交流スペースの外には「ブック交換」という箱を設置、不特定多数の地域住民による古本の交換が自由に行われており、見知らぬ人々の横のつながりが始まっている（一言カードが設置され、多くのメッセージが書き込まれている）。

この交流スペースの特徴としては、単なる古本コーナーを置いたのではなく市民スタッフによる古本の販売も行っていることである。まちカフェの基本コンセプトの一つである社会起業家育成の場としての機能も併せ持っているのである。古本を切り口とした地域活性化の課題をコミュニティ・ビジネスの視点から深めていく実践の場でもある。

③高齢者向けお弁当配達サービス事業：

この事業も新潟県地域支え合い体制づくり助成事業の採択による新規事業として2012年から展開している。特徴としては、学生スタッフによるお弁当配達であること。この事

業は単なるお弁当配達が目的でなくお弁当配達を通した高齢者の安否確認や話し相手、御用聞きなどが目的である。お弁当は使い捨ての容器ではなくお弁当箱を活用している。このことによって、利用者には配達と回収のサイクルで2度訪問することになっているのが特徴である。つまり、配達のみで終わるのではなく回収時のふれあいを想定した事業を展開している。実際に一人暮らし高齢者宅への配達を通して学生スタッフとの信頼関係が築かされ、庭先の草取りの依頼も入ってきたこともある。さらに、配達を担当している学生スタッフにも大きな変化が見られてきたのである。普段の配達はお昼に行っており、お弁当箱の回収もカフェの営業が終わる前に行うのが通例である。しかし、この学生スタッフは一人暮らしの高齢者とより多くの話しがしたくて敢えて勤務時間が終わってからお弁当箱の回収に行くのである。勿論、サービス利用者から了解のうえでの行動であることは言うまでもない。一人暮らし高齢者にとって学生スタッフは単なるお弁当配達存在ではなく見守りとしての役割を兼ねていることである。

④まちカフェスタッフの地域活動への参加：

まちカフェは町内会の組長も務めており（平成24年度）、学生スタッフは日頃から町内会に関わることを働きかけている。例えば、毎年行われている町内会の夏祭りにも毎年のように学生スタッフが参加している。また、新発田市から依頼される各種イベントへのカフェ出店も多く、町内会を超えた新発田市全体を見据えた活動を展開している。例えば、新発田市との連携事業では、毎年行われているまちづくりフェスタの運営委員会への参加や当日の司会などを学生スタッフが務めている。

⑤地元高校との連携による「芝農カフェ」事業：

地元農業高校との連携事業を2年前から進めており、これまでは地元食材で作った野菜や缶詰、ジャムなどを委託販売してきた。昨年度からはさらに連携を深め、高校生が直接まちカフェにおいて自分たちが作った食材による料理や加工品を販売するまちカフェを舞台とした芝農カフェを支援している。開催頻度は年2回であり、1回目は高校生中心のカフェ活動を展開、農業高校の日頃の活動から作られた野菜と肉をベースにした芝農ランチの提供や併せて加工品の販売と日頃の活動報告を行っている。また、2回目の開催においてはまちカフェスタッフとの連携でカフェを開いている。大学生スタッフによる接客やマナー、衛生関係に関する指導を高校生に行っている。

これらの事業を通して、大学生のみでなく地元の高校生を巻き込んだ若者の底力を商店街活性化につなげている。

⑥新発田郊外（いわゆる限界集落）における休耕地活用事業：

2年前から新発田市郊外地域の耕作放棄地を活用したそば作りを試験的に行ってきた。これには地元住民（平均年齢75歳）の協力によって行われており、今年は農高生を巻き込んだそば作りまで発展している。過疎地域に大学生や高校生が農業に関わることによる地域活性化や過疎地域のブランド食品の開発も視野にいれて事業を展開している。

この事業は毎年8月頃にそばの種まき、10月頃の収穫と試食会をメイン活動として位置付けている。この活動においてもまちカフェスタッフや地元の農業高校生による課題研究としての位置づけ、地元住民、行政、社協などの参加によって行われている。

最初は、収穫したそばをまちカフェにおいて関係者を囲んで試食する程度で終わっていたが、昨年度からは地元公民館において収穫したそばの試食会やそば打ち実演、そばを用いた新しいメニューの開発と試食の場を地域住民を巻き込んで行った。この活動には、敬和学園大学の留学生や日本人学生と一緒に参加、留学生からはエスニック⁽⁵⁾料理を披露し、地元住民から大きな反響を得た。このようにまちカフェは、カフェを拠点とした活動だけでなく地域連携事業として地域を拠点とした活動も併せて行っている。将来的には、地元高校生と大学生スタッフによる地域特産品を活用したメニュー開発を通じた地域ブランド化に向けてさらに活動を広げていく予定である。

また、この事業の特色としては、2年前から市内の生活保護者の就労支援対策として行政と協力しながらそばづくりに係っており、すでに就労に結び付いた人も現れたとの報告もあった。

⑦社会起業家育成事業：

まちカフェの経営には学生スタッフや市民スタッフも積極的に関わるようになっており、地域課題をビジネスの手法で解決する経営のノウハウを学ぶ機会を提供、そのような人材育成を目指している。

実際にまちカフェ経営におけるすべてを学生スタッフが担うまでは至っていないのが現状である。主に学生スタッフが担う金銭管理に関しては、仕入れ、売上計算などである。ただ、金銭管理に関しては大学会計とも関係しておりどこまで踏み込めるかは今後の課題である。一方、学生スタッフにはまちカフェにおける各種イベント企画やメニュー開発、新しい事業開拓など活動全般において自主性が保たれている。これまで学生主体によって行われた活動も多く、東日本大震災による被災者向けの無料カフェの開催には子ども連れの若い夫婦が何組も訪れ交流を深めることができた。また、まちカフェにはミニギャラリーの機能も備えており、学生スタッフによる企画で新発田の昔ばなし写真展を開いたこともあった。さらには、大学学生サークルと連携した子ども陶芸教室の企画、新発田市内

で行われる各種イベントへの出店カフェの企画など、自主的な活動を通して企画力を学ぶ機会をまちカフェは提供してきた。

まちカフェにおける起業家育成には学生のみでなく市民スタッフも対象となっているのが特徴である。現在のところ2名が起業を目指して活動を行っている。その一人は、古本をテーマとした起業を目指す方でまちカフェ茶話室を拠点に活動を展開している。この場所の提供は無償で行っており2年契約を基本としている。まちカフェとしても古本がおいであることで雰囲気や和むだけでなく本を媒介とした様々な触れ合いに繋がっているのも最大のメリットである。また、古本を通じた活動にはユニークなアイデアも数多く、学生スタッフにおいても古本をテーマとした経営を間接的に学ぶ良い機会となっている。古本コーナーを開設した目的には、地域住民が自分の得意を生かせる場をつくり、地域住民の生きがいを作ること。まちの人々がつながるきっかけをつくること。本を切り口に、人と人、人と本がつながる場をつくることを掲げてこれまでの活動を行い、地域社会から多くの反響を受けてきている。

もう一人の方は、自宅を改装したコミュニティレストランを起業したい方である。こちらの方は1年前からまちカフェのワンディシェフとして週3回関わっており、野菜たっぷりや体にやさしいランチには待っているお客さんも多い。こちらの方は単なるワンディシェフとしての修業だけでなくまちカフェが行っている各種イベントや地域連携事業についても理解を深めるように働きかけている。昨年12月に行われた新発田市郊外地域でのそば試食会においてはそば粉を活用した新しいメニューをつくり地域住民にも試食会を行った。

このようにまちカフェにおいては学生スタッフだけでなく市民スタッフも巻き込んだ起業家育成にむけた取り組みを行っており古本をテーマとした方は今年度4月からは独立を目指してその準備を進めている。ただ、起業家育成には課題もあり、起業家育成プログラムによってこの事業が行われていることではない。

⑧地域住民へのカフェレンタル事業など：

地域住民には、カフェや多機能型地域住民交流スペース（まちカフェ茶話室）も低価で貸し出しており、地域若者の会合や習い事、地元NPO法人の郵便受付先、シネマー・カフェなどの自主活動への支援を行っている。

この事業は主に古本をテーマとした起業を準備している方が主に担当しており、カフェのレンタル料金は5時間2000円である。さらにカフェの設備はほとんど無償で使うことが可能である。ただし、利益を目的とする趣旨の申し込みは受け付けないという基本原則を守っている。この事業の利用者の多くは若者であり、定期的に活動を行っているグルー

プが大半を占めている。代表的な活動としては、English keik shop（朝ごはんを食べながら英語を楽しく学ぶワークショップ）、ちよりこcafé（料理が趣味の地域住民が集まり、持ち寄りパーティー）、新潟県紅茶協会（紅茶の楽しみ方を知ってもらう講習会）、古本いと本（本の合コン、本の交換会、読書会など、本を切口とした活動を通じたコミュニケーション場の設定）、わらし（国際交流サークル）、かえるネット、聞き方教室などの諸団体がこのカフェレンタルの仕組みを利用して様々な活動を行っている。13の団体が2013年の開催回数は約30回に達し、利用者も321名となっている。

より多くの地域の若者がまちカフェを拠点に活動の輪を広げ、やがては地域に貢献できるきっかけづくりにつながることを願っている。この団体活動を通して起業を目指す若者も何人か現れていることへの意義は大きい。

まちカフェ茶話室の一角にはレンタルボックス⁽⁶⁾が設置されており、地域住民が作ったキルトや各種小物、福祉団体の商品が置かれて販売されている。レンタルボックスの利用方法は必ずしも販売をしなければならない原則はなく、趣味の発表の場として活用するなどいろいろである。

⑨ひきこもり若者就労支援と生活保護受給者就労支援事業

まちカフェでは、新潟若者サポートステーションの依頼で地元のひきこもり傾向の若者を週1日、3か月の期間で受け入れている。これまでのべ6人の若者がこの期間を終えて自立につながったと聞いている。ひきこもり傾向の若者が本格的な就労活動を行う前の段階として社会との接点を持つことによって自信をつけていくことは大切である。まちカフェでの活動は、掃除や洗い場での業務が大半であるが、たまにはホールにも出向いてお客さんと向き合うこともある。筆者も何回か彼らを見てきたが、研修はじめころと終わりのころの差は歴然としているのがわかる。彼らに大きく力になっているのは、市民スタッフや学生スタッフの存在であろう。学生スタッフとはななめの関係で親しみがあり、市民スタッフとは人生の先輩として多くのことを学び取ることができる。

また、新発田市との連携で郊外地域のそばづくりには市の生活保護者の方も一緒にかかわっている。生活保護者の方には引きこもりがちな傾向もあり、就労活動の前段階としてまずは体を動かし、汗をかき、他人との触れ合いを通して社会性を培っていくことを目指している。大学生、高校生、地域住民のなかに自然と溶け込みながら過疎地域でのそば種まきや収穫の作業を通して本来持っていた自信を取り戻す。特に高校生との収穫祭におけるあふれる笑顔は今も忘れられない。あとから市の担当者から聞いた話では、そばづくりに関わった人はほとんど就職が決まり自立していったようであった。

7. その他、実践活動について

まちカフェでは、上記の事業以外にもいくつかの活動を展開している。新発田市からの依頼と学生たちの企画による各種イベントへの出張カフェを通じた組織運営と企画力、経営のあり方について自らの体験を通して学ぶことである。また、昨年度からは全国大学生カフェサミットに参加していることである。名古屋学院大学において第1回目のカフェサミットが開かれ、本学のまちカフェも招聘されたのである。今年度は2回目の開催であり、香川大学において行われる予定すでに学生スタッフの招聘が依頼されている。これらの活動から学ぶ全国の優れた実践の共有は今後のまちカフェの発展にも大いに活かされることを願っている。

まちカフェには年間を通して多くの見学者が訪れており、自治会や商店街関係者、大学関係者や学生など多岐にわたる。特にまちカフェをテーマとした大学生の卒業論文執筆はこれまで2編⁽⁷⁾がある。

また、まちカフェのマスコミからの取材は特に開店後2年目がピークに達したのである。遠くは東京のテレビ局から、近くは新潟の複数の放送局からであり、地元のFM放送では生中継も行われた。この他にも新潟地方版のすべての日刊紙からまちカフェに関する活動記事の掲載があった。

一方、これまでまちカフェでは外部の助成金（2014年現在総額500万円を超えている）を活用しながら事業の拡大を行ってきた。その例として、新発田市地域福祉活動助成事業の採択による赤谷地区の買い物ニーズ調査の実施と結果のまとめ、新潟県高齢者支え合い体制づくり助成事業の採択による多機能型地域住民交流スペースの確保（まちカフェ茶話室）や新たなキッチンスペースの確保、お年寄りへのお弁当配達サービスの展開がある。他にも新潟県社会福祉協議会からの地域福祉活動プログラム公募に採択され、新発田市郊外過疎地域でのそばづくりを通じた地域活性化プロジェクトを地元高校や行政、社協とともにやっている。

これらの助成事業の結果物はその後の各種報告会や講演会、学会などの場を通して社会に還元されている。その例として、新潟県福祉大会においては2度に渡りまちカフェの実践が報告された。その他、新潟県の支え合い体制プログラムの先進事例集にまちカフェの掲載が決定されすでに原稿も提出済みである。これらの活動にはまちカフェの担当教員だけでなく学生スタッフや市民スタッフも報告に携わっていることは意義深いことである。

8. 今後の課題と展望について

以上、まちカフェ実践活動の全般について考察を深めてきたが、これらの実践活動そのものが順調に展開されてきたわけではない。今後の課題と展望について述べてみたい。

第1には、まちカフェ全体に係わる組織に関する課題である。まちカフェ開設時の組織に関する位置づけが不明確であったことは、その後のまちカフェ実践活動に大きな影響を及ぼしてきたといえる。例えば、まちカフェ担当教員の位置づけが組織上ではなかったこと、まちカフェの実務を統括するマネジャー役の位置づけがなかったことがその代表的な課題である。さらには、担当職員の位置づけや業務分担の位置づけも不明瞭であった。これらの課題はまちカフェ業務そのものの円滑な運営を妨げる要因として抱え込むこととなり、やがては学生主体というスローガンに集約され実質的な負担は学生スタッフに大きいのしかかる構造になったのである。これらの組織上の問題は、まちカフェ全般における衛生管理の面においても懸念材料とされてきたといえる。

第2の課題は、第1の課題と直結する問題であり学生スタッフ確保の難しさがあげられる。まちカフェが掲げてきた基本コンセプトを実現するためには質の高い学生スタッフの確保が不可欠である。しかし、現実には学生スタッフとして関わりたいと思っている学生は少なく、せっかく関心を持つようになってもカリキュラムの時間割との折り合いがつかないことも多く見られた。また、実際にまちカフェに関わろうとする学生の中には、まちカフェの実践がアルバイトとして理解される傾向が強く見られた。実際にまちカフェでは、給料という名称ではなく、売り上げを手当の名目で金銭として支払う仕組みであった（交通費別途支給）。その金額は普段のアルバイトには比べものではないのが現状ではあったが、この現象は学内におけるまちカフェスタッフ募集にも影響されるようになったといえる。

とはいえ、まちカフェの活動がここまで維持されてきたのは、数少ない有志ある学生スタッフたちによって面々と受け継がれてきたことであり、彼らの努力の賜物である。

学びながら手当も頂く究極のモデルはまちカフェ実践とカリキュラムとの連携、大学内における関心と理解の低調によって一部の学生に限った実践活動として定着していたといえる。ただし、学内におけるこのような状況とは裏腹に地域からの関心と協力、地域住民の参加は学生軸を補いつつ市民軸の活動として新たな広がりを見せていた。

第3には、ワンディシェフ確保の難しさである。まちカフェ開店時の構想では学生主体によるカフェ経営を念頭に置いたこともあり市民ワンディシェフの取り組みは深く考えなかった。しかしながら前述のように学生スタッフ確保の課題によって運営全般を学生スタッフに頼ることはもはや不可能であった。そこで急遽、市民ワンディシェフの仕組みを取り入れるようになったが、はじめは予測通りには上手く進まなかったのである。最終的には、市民の関わりをワンディシェフに限定せず、まちカフェ活動全般に関わる仕組みとして新たに位置づけ「市民スタッフ」という制度を設け、学生軸と並んで市民軸の活動を推奨することによってワンディシェフの課題も一気に解消されるようになってきたのである。

つまり、2年目からは学生主体によるカフェ経営という考え方を改め、市民の関わりを念頭においた市民スタッフ制度を新たに取り入れたのである。なお、市民スタッフからは起業を目的にまちカフェに携わる人も現れるようになってきた。起業家育成という方針は学生のみでなく、一般市民もその対象になってきたのである。

以上のように考えていくと、開設当時掲げていた学生主体によるカフェ経営全般という到達までに達することはできなかったが、まちカフェ運営におけるスタッフの人事やシフト管理、会計や仕入れ、メニュー開発や各種イベント参加有無の決定、イベント企画などにおいては学生たちの主体が尊重され、実践活動に結び付いたのである。

また、まちカフェが掲げてきた社会起業やコミュニティ・ビジネスの実践モデルに照らし合わせた場合、特に財源と分配などについては多くの課題が残る。財源に関しては、活動から生み出される財源確保には限界があり、その多くは大学の支援を受けてきた。ただし、財源の効率化を考えると運営スタッフの確保や事業展開の効率化を図るべきであるが、ここでは、社会起業やコミュニティ・ビジネスの教育的な側面を考慮したより多くの学生たちが関わる仕組みを取り入れたことであり、これらを念頭に置いた議論が必要である。

これらの課題を踏まえた今後の展開には、全学をあげた組織的な取り組みのあり方を明確にし、その活動に関わる教職員や学生に対する組織図をしっかりと位置づける必要がある。大学の学内生活では学べない実践を地域住民の力を借りながら学生たちの成長を促す基盤をまちカフェは3年半の実践を通して整ってきた。これまでの実績を第1期とするならば、これからのステップを第2期として位置づけ、これまでの点としての取り組みを線に繋げ、面としての第2期をどう展開させていくのか、大学の地域貢献も視野に入れた学内体制の整備と地域との一体的な取り組みがより一層求められる時代になってきたのである。幸いに本学は2015年度を目途に地域展開型アクティブラーニングの取り組みの実践を計画している。まちカフェ・りんくの実践は県内外において広く主知されるようになってきた。まちカフェが目指してきた基本コンセプトの実現が第2期において実を結ぶことを関係者の一人として願いたい。

註

- (1) ここではコミュニティ・ビジネスや社会起業という言葉を用いたが、これ以外にも社会的企業、ソーシャルエンタープライズなど多様な呼び方が存在している。それによって用いる用語の概念も多様であるのが現状であり、ここでは概念整理を試みるよりは、これらの用語が用いられる機能に着目した実践報告に比重をおいて論じることとする。
- (2) ここでいう「福祉マインド」とは、次項で述べたライフデザイン・コースの教育目標において示した通り、共生社会学科のコア・カリキュラムである社会福祉関係専門科目全般における福祉への基本的な考え方や方法を見据えた意味として用いている。これらの考え方はまちカフェ実践の基本コンセプトに連動するものである。
- (3) NPOの組織や団体そのものの活動すべてを図でいうAの領域に位置付けるのはやや非現実的などころも指摘されよう。つまり、現実的には図でいうCの領域においてすでに実践活動を行っている組織や団体も存在しているからである。したがって、図においてもAとCの領域にまたがる位置づけとして記してあるのもその理由である。しかし、現実的に多くのNPOはAの領域において実践活動を行っている団体が多いのも事実であろう。
- (4) まちカフェにおけるワンディシェフの仕組みは、まず料理に興味のある方で特に専門性は問わない。ワンディシェフになれる方には、ランチに係る食材費の半額を大学負担とし、その日のランチ売り上げの半額をワンディシェフに還元する仕組み。殆どのワンディシェフの方々は売り上げよりも学生スタッフとの交流やお客さんとの触れ合いを楽しみにしている。ワンディシェフには高齢者が多く、生きがいや自己実現としての位置づけもある。
- (5) 今回参加した留学生の国籍は、中国、韓国、パキスタンの計8名であった。特に韓国の留学生からはトックポッキという韓国の子どもたちや庶民がおやつ感覚でよく食べる料理を作って振る舞った。トックとは、お餅のことであり、ポッキは炒めることの意味であり、ちょっぴり甘辛の味が特徴である。
- (6) レンタルボックスの貸し出し料金は、月500円で売り上げの1割を手数料として徴収している。ただし、福祉団体には使用料は無料とし、売り上げの1割のみ頂いている。レンタルボックスの狙いは単なる売上のためではなく、作品を通した自然な触れ合いづくりのきっかけが大きな目的である。
- (7) 大学4年生の卒論としてまちカフェの実践活動が素材として執筆された事例である。一つは群馬県のT大学からの4年生で何回かのやり取りの上で執筆された。もう一つの卒論は、敬和学園大学共生社会学科4年生からの執筆であり、まちカフェにはスタッフとしても長く関わっており、実践を通した卒業論文の執筆であった。こちらの学生は後ほど大学院への進学につながり、大学院でも類似した研究を行っているとのことであった。